

# 持続可能な社会づくりの担い手となる児童の育成を目指して ～地域の教育資源を生かしたESD実践を通して～

森町立森小学校 学級数 12 (校長 伊藤 明彦)

## 実践の概要

本校では、SDGsの視点に立ち、持続可能な社会づくりの担い手となる児童の育成を目指した教育活動を推進するとともに、校区にある青葉ヶ丘公園親水ひろば水路に設置されているマイクロ水力発電、ハピネスひまわり太陽光発電所、森地熱発電所等の教育資源を生かした持続可能な開発のための教育（ESD）を実践している。

### 1 実践の目的

体験活動を通して、自分たちが暮らしている森町の新エネルギーに対する取組を探究し、社会環境に関する理解を深めるとともに、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく力を育てることを目的として、本実践に取り組むこととした。

### 2 実践内容

#### (1) 実施計画

- ・日常生活に欠かすことのできない電気を作り出すエネルギーの種類や発電方法を調べる活動を通して、エネルギーに関わる現状と課題について考える活動を春に実施する。
- ・児童が目的意識と課題をもって、森町の新エネルギーの取組について情報を収集したり、見学に行つて実際に見たり聞いたり体験したりして学習に対する理解を深める。
- ・自分たちが暮らしている森町の取組の素晴らしさや、SDGsの視点で自分たちができる身近な取組に焦点を当て、第4学年の児童へ向けて発表する。

#### (2) 取組の具体

- ・総合的な学習の時間において、自分たちが暮らしている森町の新エネルギーについて、インターネットを使って調べたことから、児童一人一人が脱酸素社会の実現に向けた新エネルギー利用について、探究的な課題を設定した。
- ・校区にある青葉ヶ丘公園親水ひろば水路に設置されているマイクロ水力発電や、ハピネスひまわり太陽光発電所、森地熱発電所等の見学を通して、新エネルギーについて、情報収集を行った。また、森町役場の自然エネルギーに関する情報サイトや発電に関わる関係機関のWebページを活用し、各自で詳しく調べたいことについて情報収集を行った。
- ・1人1台端末を活用し、収集した情報を整理するとともに、共同編集機能により、同じ課題を設定した児童同士で内容について交流・協議し、新エネルギーの特色や自分たちの生活との関わりについて理解を深めた。
- ・これまで調べたことや、これからの自分たちにできること等について、SDGsの視点からスライド資料にまとめ、第4学年に向けて発表を行った。発表することを通して、脱酸素社会の実現に向けて新エネルギーの重要性について理解を深め、持続可能な社会づくりに参画するために自分たちができる身近な取組について、多面的・多角的に捉えるとともに、自分たちが暮らしている森町の取組の素晴らしさに気づき、愛着を深めた。

#### (3) 取組後の点検・評価、工夫改善

児童の発達段階を踏まえて、継続的に環境教育に取組を推進していくことができるよう、校区にある教育資源の効果的な活用の仕方などについて、工夫改善を図った。

#### (4) 改善後の取組

町内の関係機関や、中学校と連携を図りながら、持続可能な開発のための教育の推進に向けて、総合的な学習の時間の指導計画の見直しに向けた課題を明確にした。

### 3 実践のポイント

- ・児童一人一人が身近な課題として捉え、課題解決に向けて主体的に取り組むことができるよう、地域にある施設を実際に見学したこと
- ・地域と連携した環境教育を推進することができるよう、地域資源の活用や関係機関と連携した取組を推進したこと



【マイクロ水力発電の様子】



【太陽光パネルに触れる様子】

太陽光発電  
2023年5月24日 撮影 1022

メリット  
太陽光発電は、石油を燃焼させて発電を繰り返す火力発電のように大気汚染物質を発生させることがありません。太陽光発電協会によると、1kWシステムの年間発電量は1,000Whとします。新設系シリコン太陽電池によるCO2削減効果は年間で399.5kg/kWh、石油の削減量は年間で227リットルになるそうです。

デメリット  
・設置費用が高い  
・定期的なメンテナンスが必要になる  
・発電量が気候に左右される  
・設置に向いていない家もある  
・反射光トラブルが発生する可能性がある  
・パワーコンディショナの設置場所が必要

【1人1台端末のまとめ】

# 町全体で推進する SDGs の取組

上士幌町立上士幌小学校 学級数 14 (校長 山田 圭介)

## 実践の概要

本町は、脱炭素先行地域に選定されるなど、SDGsの達成に向け、様々な取組を推進している。本町に育つ小学生がSDGsの概要や取組等について学び、持続可能な社会の担い手となるよう、令和2年度より総合的な学習の時間を中心に、町と連携したSDGsに係る学習を第4～6学年で推進している。



【糠平ダムの見学】

## 1 実践の目的

総合的な学習の時間「かみしほろ学」において「SDGsの概要」や「目標の達成に向けた取組等」に係る学習を町と連携して推進することにより、持続可能な社会の担い手を育てる。

## 2 実践内容

### (1) 実施計画

学年	学習内容(教科等)	時数	授業者
4	・ゴミの処理について調べよう(社会科)	6	学級担任 栄養教諭、役場町民課職員
	・給食から生まれるゴミについて考えよう(総合的な学習の時間)	10	
5	・SDGsの17の目標について知ろう(総合的な学習の時間)	35	学級担任、役場ゼロカーボン推進課職員、その他外部講師
6	・持続可能な町を目指して(総合的な学習の時間)	20	学級担任、役場ゼロカーボン推進課職員

### (2) 取組の具体

#### 第4学年の内容

社会科で「ゴミの処理」について学習した後、総合的な学習の時間で栄養教諭から給食の残食が廃棄されていることを学び、ゴミを少なくする取組等を新聞にまとめる活動を行ったことにより、食べ物を大切にすることを学ばせた。その後、給食の残食を少なくするよう学年で取り組むとともに、給食の残食を生かすこと(コンポストによる堆肥作り)について、役場町民課職員から説明を受け、コンポストでできた堆肥は、作物栽培に生かされ、栽培された野菜を食べることなど、さらにSDGsへの意識を高めた。

#### 第5学年の内容

総合的な学習の時間で、17の目標に関する座学や体験学習などを行った。役場ゼロカーボン推進課職員からの説明や、ダムやバイオガスプラントの見学等による再生可能エネルギーの学習、自動運転バスの乗車等による住み続けられる町づくりに係る学習等を通して、町として取り組んでいるSDGsへの理解を深めた。

#### 第6学年の内容

第5学年で学んだことを基に、自分たちにできることを考え、取り組んだ。身の回りの課題や自分にできそうなことを考えながら、17の目標から1つ選んで具体的な取組を選択し、8か月ほどかけて取組を進めた。後半では、アンケート等により検証を行うとともに、プレゼンとしてまとめ、町長や保護者も参加する「SDGs発表会」で発表した。

### (3) 取組後の点検・評価、工夫改善

第6学年へのアンケートでは、「SDGsの学習は楽しい」と回答した児童の割合は77%、「SDGsの学習は大切」と回答した児童の割合は100%であり、SDGs学習への意欲や意識の高まりが感じられた。一方、昨年度までは町ゼロカーボン推進課職員が中心となってカリキュラムを編成したり、授業を展開したりしていたため、説明が多い授業や体験のみの授業等、目標の達成に向けて効果的ではない授業が散見されたことから、今年度は、学校と役場ゼロカーボン推進課とが授業内容について協議する機会を設けた。

### (4) 改善後の取組

17の目標に係る説明や施設見学等の体験活動に加え、児童が目標の達成に向けた取組を考えるなど、児童が思考する場面を位置付けた指導計画を、学級担任とゼロカーボン推進課職員で毎時間検討するようにしたことにより、第6学年のアンケートにおいて、「自身でもできることに取り組みたい」と回答した児童の割合が87%となり、児童が自分事としてSDGsの推進について考えることができるようになった。

役場ゼロカーボン推進課職員がT1で行う授業、学級担任がT1で行う授業、学級担任がT2で児童の思考場面をサポートする授業等、役割分担を明確にした授業を行うようにした。

## 3 実践のポイント

- ・持続可能な社会の創り手の育成に向け、SDGsの学習を推進することにより、自分の住む町の取組について理解を深め、SDGsの視点で生活の質を高めようとする児童の意識の向上を図ったこと
- ・町全体で「持続可能な社会の創り手を育成しよう」という機運が高まり、体験活動の充実や授業内容の改善等、町ぐるみの取組を充実させたこと